

【論文】

## 愛知県設楽町における 岩石信仰の地質学的検証

Geological verification of stone belief in Shitara town, Aichi prefecture, central Japan

鈴木 寿志・吉川 宗明

SUZUKI, Hisashi & YOSHIKAWA, Muneaki

### Abstract

There is traditional stone belief in Shitara town, Aichi prefecture, central Japan, which is indicated by some peculiarly named and shaped stones, i. e. mountain god, boat stone, standing stone, snake rock, shining stone and turtle rock. These six stones were geologically investigated to know their rock type and cause of peculiar shape, and to confirm, if their shapes were artificially made or naturally created. As a result, mountain god, boat stone, standing stone and snake rock were naturally created, which all belong to late Cretaceous granite in the Ryoke metamorphic belt of the inner zone of southwest Japan. The shining stone is highly metamorphosed bedded chert of the Ryoke metamorphic belt. The cause of shining nature seems to arise from the piezoelectric effect of quartz crystals that were changed from amorphous cherts by high temperature metamorphism. The turtle rock is made of gritty sandstone of the Palaeogene Shitara group. Its enigmatic shape appears to be a sandstone nodule, although no positive evidence for nodule could be observed at the site due to its massive feature without sedimentary structure. Granite rocks of mountain god, boat stone, standing stone and snake rock have huge bodies, ranging in their sizes from 2.5 to 7.5 m. The megalithic nature of these rocks results from the weathering mode of granite which creates hard core stone surrounded by joints. It will be further investigated, if the megalith belief in Japan tends to be restricted within granite zone or not.

### Zusammenfassung

Im Ort Shitara der Präfektur Aichi, zentrales Japan, gibt es den Steinglauben, der mit

einigen eigenartig gestalteten Gesteinen, benannt als Berggott, Bootstein, aufstehender Stein, Schlangenstein, scheinender Stein und Schildkrötenstein. Diese sechs Steine wurden geologisch untersucht, um deren Gesteinstyp und die Ursache ihres Gestaltes zu klären, und um zu bestätigen, ob dieses eigenartige Gestalt künstlich hergestellt wurde oder naturell gestaltet. Infolgedessen wurden der Berggott, Bootstein, aufstehender Stein und Schlangenstein naturell gestaltet, welche alle dem oberkretazischen Granit im metamorphischen Gürtel Ryoke der Innenzone Südwestjapans zugehören. Der scheinende Stein ist ein dünnschichtiger Radiolarit des metamorphischen Gürtels Ryoke, der sich wegen des starken Hochtemperatur-Metamorphismus in den Quarzkristall verwandelt. Die Ursache scheinendes Merkmals stammt von der piezoelektrischen Wirkung des Quarzkristalls anscheinend. Der Schildkrötenstein besteht aus dem grobkörnigen Sandstein der paläogenen Gruppe Shitara. Seine eigenartige Gestalt sieht wie eine Sandsteinknotte aus, obwohl kein positiver Beweis für eine Knotte wegen seines sedimentstrukturlosen und massiven Charakterzugs beobachtet wurde. Granitische Gesteine von Berggott, Bootstein, aufstehender Stein und Schlangenstein besitzen riesige Körper, deren Größen zwischen 2,5 und 7,5 m sind. Diese Granit-Megalithen rühren von der Verwitterungsart des Granites her, welche harten Kernstein zwischen den Klüften erzeugt. Es wird weiter überprüft werden, ob die Verbreitung des japanischen Megalithglaubens sich ausschließlich auf das Granitgebiet beschränkt oder nicht.

## はじめに

愛知県北設楽郡設楽町は、県北東部の山間部に位置する町である。集落は、豊川上流の谷沿いと矢作川支流の名倉川沿いに点在する。この地を 1951 年に訪れた考古学者の大場磐雄は、調査メモ「楽石雑筆」に設楽町における数々の岩石信仰の事例を記録した。これは 1970 年代に刊行された大場磐雄著作集には掲載されず未公開であったが、2016 年に『楽石雑筆（補）記録－考古学史』に公開・刊行され、初めて設楽町の岩石信仰の事例が明らかにされた。著者の一人吉川は、他の文献では記載されていない事例が多く含まれること、また他地域に比べて事例数が多く記録されていることから岩石信仰において特徴的な地域と考え、2019 年に調査を開始した。

その一方で、設楽町松戸の豊川に設楽ダムを建設する工事が 2017 年（平成 29 年）

に始まり、重要な岩石信仰の地が水没する可能性が高まった。一刻も早く調査に着手する必要があることから、2021年度の真宗総合研究所共同研究「地質学からみた日本文化論の新構築」の中でも最優先課題となった。

またこれは設楽町に限ったことではないが、地方の人口減少・過疎化に伴い、地域の信仰や文化が継承されずに廃れていくことが全国的に懸念されている。設楽町の人口動態を見てみると、平成23年1月に6000人を超えていた町人口は、令和5年9月には4200人ほどまでに減少した<sup>1)</sup>。そのような状況下において、特に記録に残りにくい民間信仰の一つである岩石信仰については、聞き取り調査と現地調査が喫緊の課題となっている。

## 岩石信仰における人工設置説・自然形成説

ところで、岩石信仰を論じる際には、信仰・祭祀の対象となった岩石が自然の地形のまま神聖視されたのか、それとも、人為的に岩石を運搬・設置・加工して構築したものが神聖視されたのか、という観点がある。古くは民族学者の鳥居龍蔵が日本各地で巨石を踏査してそれらを人工的な「巨石遺跡」と認定し、日本における巨石文化の存在を説いた(鳥居、1926)。また、奈良県桜井市の三輪山の山中にある巨石群は「磐座」の代表的な例として知られるが、これらを人工の手が関わった構築物として紹介した考古学者もいる(樋口、1927)。かつて考古学においては岩石信仰を論じるなかで、人の手で運搬できないような巨石であっても、一見規則性をもった構造をみせる外観というだけで人為的な遺跡とみなす報告があったが、これらは本当に人工的な構築物だったのかに疑義が残る。

さらに、岩石信仰は学術的領域にとどまらず、市井の人々にもしばしば注目されることがある。たとえば奈良県山辺郡山添村の鍋倉溪は、谷間の溪流で形成された自然地形としての岩石群の集積だが、自然物ではなく天の川を地上に映すため人工的に構築した巨石列とみなす人工説が主張され(柳原、2011)、自治体のお墨付きを受けて観光の目玉として宣伝されている(山添村観光協会ウェブサイト)<sup>2)</sup>。また、兵庫県神戸市の六甲比命大善神社<sup>ろっこうひめだいぜん</sup>は近年パワースポットとして人気を博し

1) 設楽町公式ウェブサイトの統計資料「設楽町人口世帯数集計表」による。

<https://www.town.shitara.lg.jp/soshiki/5/1177.html> (2023年9月11日閲覧)

2) 山添村観光協会：山添村イワクラMAP。

<https://yamazoekanko.jp/wp/wp-content/uploads/2021/02/iwakura.pdf> (2023年9月11日閲覧)

ている場所であるが、境内に広がる巨岩についてウィキペディアでは、「六甲比命神社の磐座は天然に出来たものではなく縄文時代のころ、縄文人たちの手によって巨石を積み上げて出来た人工の磐座である」と編集されており<sup>3)</sup>、この文言が他のインターネットサイトなどでも利用されているため、なかば歴史的事実として広まり既成事実化されつつある。しかしながら、上記で紹介した事例はいずれも、考古学および地質学の立場から科学的な証明はなされていないままであることに注意しなければならない。

以上、岩石信仰にまつわる人工説についていくつかの事例を取り上げたが、それらの多くは発掘調査で人工的な証拠が検出されたものではなく、また、地質学的な批判を経由したものではないことがわかる。このような状況下では、自然の巨石露出の地形が誤って人工の遺跡としてみなされることも相当数潜んでいるのではないかと疑われるが、そのあたりの自然説・人工説の判断基準が確立されているとは言い難い状況にある。

そこで本稿では、設楽町の岩石信仰を記録保存するなかで歴史学分野の吉川と地質学分野の鈴木が立ち会って観察したことで、ただ歴史的な経緯をまとめるのみならず、地質学の立場でそれぞれの岩石の成因を観察し、岩石信仰を文化財として正しく取り扱う一方法を提示したい。

## 設楽町の地質

設楽町の地質は、中西部の領家花崗岩・変成岩と、東部の設楽層群に大きく分けられる（第1図）。

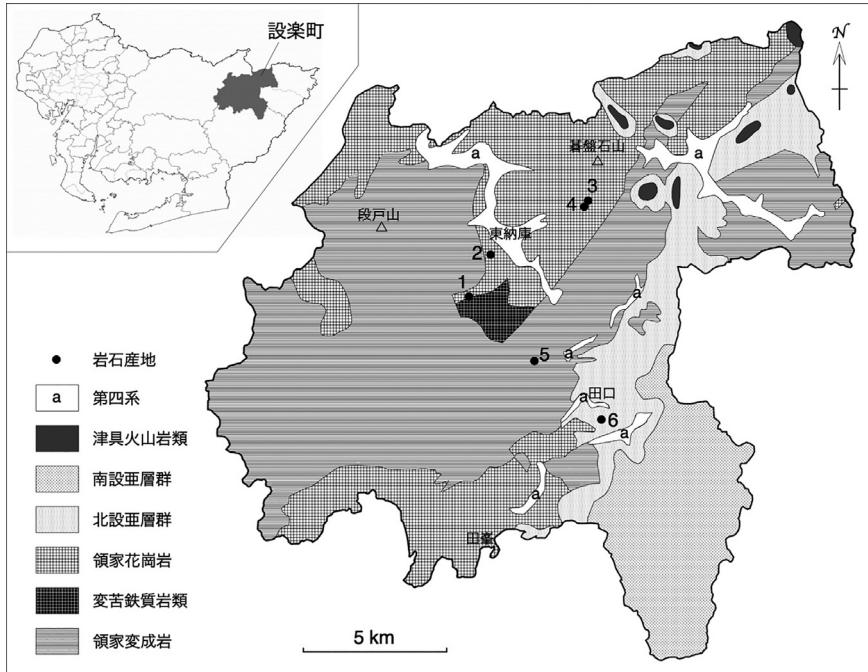
領家花崗岩は、白亜紀新世に形成された花崗岩ないしは花崗閃緑岩で、設楽町の北部と南部に分かれて分布する。領家変成岩は、南北領家花崗岩分布域の間に広く露出する。美濃帯のジュラ紀付加体が、領家花崗岩により低圧高温型の変成作用を受けたもので、源岩は泥岩・砂岩・チャートなどからなる。領家花崗岩と領家変成岩に付随して、変塩基性岩の小岩体が設楽町中央部に分布する。

設楽層群は、下部の海成堆積層からなる北設亜層群と上部の火山岩類からなる非海成の南設亜層群に分けられる（嘉藤、1955）。北設亜層群は、礫岩・砂岩・

---

3) ウィキペディア フリー百科事典：六甲比命神社（2022年7月30日版）。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/六甲比命神社>（2023年9月11日閲覧）



第1図 設楽町の愛知県内の位置（左上）と設楽町の地質図および報告する岩石の産地。地質図は牧本 博ほか（2004）の20万分の1地質図「豊橋及び伊良湖岬」に基づき作成した。1：宇連の岩クラの山の神，2：お船石，3：立石，4：蛇岩（蛇石），5：コウゴ／光石，6：亀石（亀岩）。

Figure 1. Location map of Shitara town in Aichi prefecture (upper left) and geologic map of Shitara town, indicating localities of belief stones described in the text. Geologic map is created on a basis of the 200,000:1 geologic map “Toyohashi and Irako cape” by Makimoto et al. (2004). 1: mountain god at Ure hamlet, 2: boat stone, 3: standing stone, 4: snake rock, 5: shining stone, 6: turtle rock.

泥岩からなり、凝灰岩を伴う。汽水生～海生の二枚貝化石を産する。凝灰岩のフィッシュトラック年代と貝化石を検討した林・興水（1992）は、北設亜層群が新生代旧成紀始新世から漸新世の地質年代であることを示した。一方の南設亜層群は、流紋岩質の熔岩と火山碎屑岩類からなる。林・興水（1992）によれば、南設亜層群の火山は新生代新成紀中新世前期に活動した。

### 調査対象の岩石

本研究で調査した信仰対象ないしは特別視された岩石は、次の通りである。

- ・宇連<sup>うれ</sup>の岩クラの山の神
- ・お船石
- ・立石
- ・蛇岩（蛇石）
- ・コウゴ／光石
- ・荒尾の亀石（亀岩）

以下にそれぞれの信仰対象について、位置、歴史的経緯、現況、地質学的観察結果と所見を述べる。

### (1) 宇連の岩クラの山の神

豊川の最上流部の谷に位置する宇連集落に存在する（第1図および補遺の地点1）。宇連では個人単位でまつる山の神が多いといい、そのうちの一つで、現・後藤秀夫氏の家系でまつられていたものである。1951年に名倉村長の金田倭三郎の名で文化財発見届が出された「宇連の磐座」に該当する存在で、字名である「岩クラ」の地名の元となったと思われる岩石である。

前掲の文化財発見届では「巨石三個集団するを古来山の神と称し」たものと記され「人工を加えた形跡はない」との所見が付される。いわば自然形成説に基づく岩石信仰の文化財として当初から記録されていたことになるが、それでも現地に群集する岩石群には鋭角的な縁をもつもの、二段に積み重なるもの、やや列状に並んで分布するものが見られ、人工的に設置されたとする主観的判断が生まれやすい素地がある。この状況に対して、本稿では地質学的所見を記載する。

岩石は粗粒でやや斑状を呈する花崗岩で、細粒花崗岩の脈を伴う。山の神は、高さ4mほどの露岩が2つ並んで立っており、その周囲に大きさ1.5～2mほどの浮石の岩塊が複数分布する（第2図）。文化財発見届ではこれらのうち3個の

第2図 宇連の岩クラの山の神。領家帯の粗粒花崗岩からなる。

Figure 2. Mountain god at Ure hamlet (locality 1). Coarse-grained granite of the Ryoike belt crops out.

第3図 宇連の岩クラの山の神。鋭角な縁をもち、二段に積み重なっているように見える。

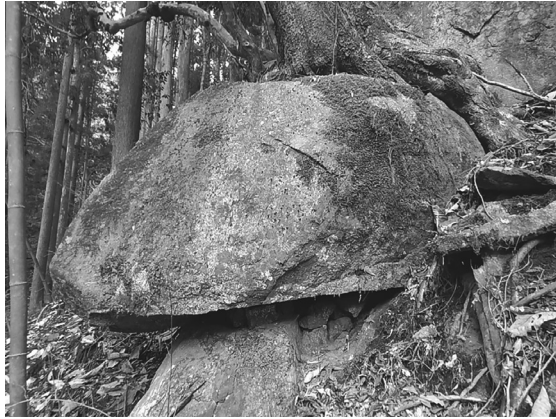
Figure 3. Mountain god at Ure hamlet. A rock having sharp basal edge appears to rest on a weathered rock.

第4図 宇連の岩クラの山の神。やや列状に並んでいるように見える。

Figure 4. Mountain god at Ure hamlet. Three or four rocks appears to make a line.



第2図



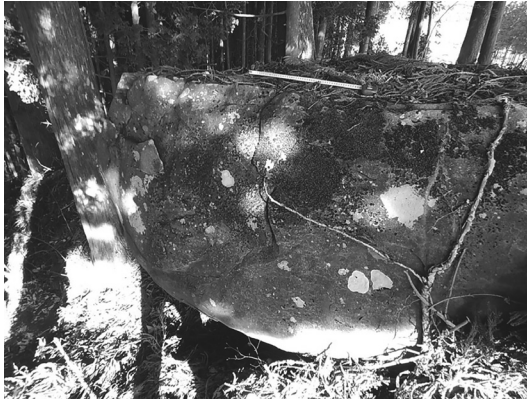
第3図



第4図



第 5 図



第 6 図



第 7 図



岩石を取り上げ「巨石三個集団する」と注目し、山の神の代表格としたのが興味深い。山の神として祭祀がされていた時に、この3個が山の神の中心として認識されていたのかどうかまではわからないが、地質的な岩石の無数の分布から人がどのように代表的な信仰・祭祀対象を抽出するのかという点において興味深い事例である。

宇連の岩クラには、鋭角的な縁をもち、二段に積み重なったように見える岩石が認められる(第3図)。これらの成因については、花崗岩に一般に認められる水平節理の下盤の風化が進んだ結果、第3図のように二段に積み重なった構造をなしたと推察される。ただし、周囲の状況から上盤の岩塊が移動した浮石にも見えることから、地震や樹木の根張りによる移動があった可能性が高い。

山の神の一部には、やや列状に並んで分布するように見える岩石が存在する(第4図)。人為的に石垣として配置した可能性もあるが、花崗岩に一般に見られる垂直節理に沿って風化が進み、並んで見えるようになった可能性も考えられる。

## (2) お船石

大平地区がまつる小鷹神社の祭神が、当地に来た時に乗っていた船だという。小鷹山の頂上に鎮座した小鷹神社の祭礼日に、雨が降っていた場合は小鷹山頂まで登らず、山腹にあるお船石で遥拝するという風習があった。須恵器の破片数個が採集されているという。

現在はゴルフ場・名倉カントリークラブ、3番ヤードの斜面奥に存在する(第1図および補遺の地点2)。厚さ1.3～1.4m、長さ7～7.5m、幅1.5mほどの板状の岩石が、2基並んで分布する(第5図)。まさに船と表現するのにふさわしい形状である。岩石は細粒緻密な花崗岩で、一般的な花崗岩と比べて粒子はかな

第5図 お船石。小鷹神社の祭神が乗ってきたと伝わる。

Figure 5. Boat stone (locality 2) of the Kotaka shrine. An enshrined deity was on board.

第6図 お船石の舳先ないしは艀。表面が薄皮状に剥がれやすくなっている。この部分は細粒緻密な花崗岩からなる。

Figure 6. The bow or stern of the boat stone. Note that the surface of the stone is thinly peeled off.

This surface is made of fine-grained granite.

第7図 お船石の上に残されていた杓石。かつてこれを用いて鳥居が立てられていたという。

Figure 7. Foundation stone is left on the boat stone. This stone was previously used for standing a torii, a symbolic gateway for Japanese shrine.

り細かい。表面を詳しく観察すると、表面の厚さ数 cm が薄く剥がれやすくなっており、タマネギ状風化の芯岩のようにも見えるが、形状は丸くなく、板状である（第 6 図）。一つの船石の上には 2 つの円柱状に加工された花崗岩が載っており、内部が途中までくり抜かれている（第 7 図）。これは鳥居の沓石として用いられていたという（北設楽郡史編纂委員会 [編]、1968）。

船形の同じような形状の岩石が並行して存在することから、人為的に同一形状の岩石を 2 つ用意したとみる向きもあるかもしれない。しかし、細粒花崗岩は粗粒花崗岩の間に貫入して脈状に産する場合があり、比較的風化に弱い周囲の粗粒花崗岩が浸食された後に、板状細粒花崗岩のみが取り残されたとみられる。そのような板状岩塊が 2 つ割れて分布するに至ったと推察される。

### (3) 立石

市之瀬の集落から笹暮峠へ至る道沿いで、碁盤石山の登山口より少し上流側にいった沢の中にある巨岩（第 1 図および補遺の地点 3；第 8 図）。この岩石についての記述は、確認したかぎり 2016 年に公開された故・大場磐雄氏の調査メモだけに記載されている。通行人が小石を投げてこの立石の上に乗るかどうかを試す風習があったという。岩石は弱い片麻状の組織を持つ粗粒花崗岩である。岩の上には言い伝えの通り、小石が載っていた（第 9 図）。

高さ 5 m ほどに達する規模で、立石の名称の通り、通常は広い面を下に横たわる方が安定するが、この岩石は広い面を横に向けてしっかり立っている。立石は沢の中にあることから、土石流などの流れの中でたまたま狭い面を下にして安

---

第 8 図 立石。沢の中に存在するが、しっかり立っている。粗粒花崗岩からなる。

Figure 8. Standing stone in small stream (locality 3). Coarse-grained granite.

第 9 図 立石の上に小石が載っている。かつて通行人が小石を投げて上に乗るかどうかを試していた。

Figure 9. There are gravels on the standing stone. Previously, pedestrians tried to throw gravels onto the top of the standing stone.

第 10 図 蛇岩。現地看板では蛇石と示されていた。側面に細長い紐状のものが絡み付いているように見える。

Figure 10. Snake rock (locality 4). Snake-like bands are seen on side of the rock.

第 11 図 蛇岩の帯部分の様子。帯部分は細粒花崗岩で構成されるが、間には極粗粒なペグマタイト質な部分が認められる。

Figure 11. Detailed surface of bands on the snake rock. Bands are composed of fine-grained granite, which intercalates a very coarse-grained pegmatitic band.



第8図



第9図



第10図



第11図



第 12 図



第 13 図



第 14 図

定するに至ったのであろう。人が立石ほどの大きな重量岩塊を、わざわざ立てて起こしたというのは、あまり現実的ではないと考えられる。

#### (4) 蛇岩 (蛇石)

立石のすぐそばの斜面下に分布する転石 (第1図および補遺の地点4; 第10図)。大きさは2.5 m×4 mほどである。蛇の頭に似た形だから蛇岩と呼ばれた話と、蛇が絡みついた時にできたような痕が残るから蛇岩と呼ばれた話がある。信仰されているわけではないが特別視をもって命名された岩石である。このような「奇石」に属する岩肌をもつ岩石は地質学的にはどのように説明できるだろうか。

岩石は、片麻状の組織を持つ粗粒花崗岩からなる。岩石の側面には、命名の由来となった厚さ40 cmほどの帯が岩石を取り巻いている。この帯をよく観察すると、細粒部と粗粒部が互層をなす様子が観察される (第11図)。また粗粒部の一部は極粗粒の石英粒子が集合するペグマタイト様の組織を呈する。花崗岩が冷却・固結する過程の末期に、マグマの残液が隙間に入り込み、急激に冷やされたため細粒化した。ただし最後に残ったわずかな隙間では、石英の結晶がゆっくり成長し、極粗粒部を構成したものとみられる。

つまり、岩石表面に線刻や模様のように規則的な特徴がみられたとしても、それは人が彫り込んだという解釈のみに陥るのではなく、地質学的批判を経ることで多角的に自然物・人工物の評価を下すことが求められる。

#### (5) コウゴ／光石

豊川と戸神川に挟まれた標高645 mの山を、大名倉ではコウゴと呼び、川向では光石と呼ぶ。山の北斜面に岩陰をもつ岩塊が存在する (第1図および補遺の

---

第12図 コウゴ／光石。再結晶が著しい層状チャートから構成される。

Figure 12. Shining stone crops out on the steep slope (locality 5). Shining stone is made of highly metamorphosed bedded chert, which are folded tightly in part.

第13図 コウゴ／光石の下方斜面。露頭から剥がれ落ちた石英質な転石がガレ場をなす。

Figure 13. Lower slope of the outcrop of shining stone. Many cherty stones are scattered on the slope, which can be naturally rubbed each other, shining due to piezoelectric effect.

第14図 亀石 (亀岩)。塊状無層理の極粗粒砂岩からなる。

Figure 14. Turtle stone, made of gritty sandstone of the Hokusetsu subgroup of the Shitara group. Sedimentary structures are not seen, but an upper left crack of the outcrop seems to be a bedding plane.

地点5；第12図)が、これがコウゴ・光石の語源となった岩石であるかは断定できない。コウゴに関する地名や岩石は、北九州から西日本にかけて多く、東日本でも分布は見られるが、中部地方ではほとんど確認されていない。本例はその中部地方の貴重な事例の一つとなる。

現地には、山腹斜面を流れるように目測で幅約20～30mの石の列が形成されている。1個1個の石の大きさは大小さまざまだが、人頭大ほどの大きさのものが目立ち、人の手で運ぶことが可能な大きさである。石で敷いた道のようにも見える規則性から、先述した奈良県鍋倉溪のように人工説が浮上する余地もある事例である。

これらの岩石は、地質学的には高温変成作用を受けた層状チャートで、一部折りたたまれた褶曲構造をなす。層理面に沿って剥がれ落ちやすく、くずれた岩片が山腹斜面を下り、ガレ場をなしている(第13図)。このことから、自然成因の範囲内で充分説明が可能な地形である。

なお、「光石」という名称については、実際に光った可能性はおそらく正しいと思われる。高温の変成作用によりチャートはほぼ純粋な石英と化しており、光る現象は石英の鉱物としての性質が顕在化したと推測される。石英に圧力をかけると、圧電効果により電圧が発生して光を発する。石英同士がこすり合うだけでも発光するので、灯りのなかった昔には何らかの理由でこすれ合あったガレ場のチャート片が発する光もよく見えたのだろう。

## (6) 亀石 (亀岩)

田口と荒尾の間の山中に存在する(第1図および補遺の地点6)。亀の頭のような構造と、その周囲に洞穴状の空間を持ち、さらに隣接してオーバーハングした岩陰に、平たい石を直方体状に石積みした施設が現存している(第14図)。祭祀や神聖視の対象だったかは未確定ながら、上記の通り特別視される岩石の要素を複数併せ持つ奇石である。なお亀の頭のある側の裏にも深い横穴があり、その入口の上には「亀岩」と彫られている。

岩石は、設楽層群北設亜層群に属する塊状無層理の極粗粒砂岩で、細礫の角礫を含む。おそらくノジュール化した部分が硬く残され、周囲が削られて亀の頭のような形状と推測されるが、なぜ亀の頭の周囲だけ岩盤の奥へ削り込まれているのかはよく分からない。したがって、現時点で成因は不明である。ただし、あまり

目立たない山の中にもかかわらず、奇石の存在を認識している点は、設楽町の人々の山地利用および岩石を見る目が隅々まで行き渡っているようで、興味深い。

## 考察

設楽町で信仰されたり、特別視されている岩石について現地調査を行い、岩石の種類を特定するとともに、信仰や特別視されるに至った地質学的要因を述べた。今回取り上げた岩石では、山腹に群集する岩石の積み重なり（宇連の山の神）、鋭角的な亀裂（宇連の山の神）、類似した形状の岩石が横並びする状態（お船石）、岩石が立つ状態（立石）、岩肌に見える模様や線刻らしきもの（蛇岩／蛇石）、岩石が列状に敷き並ぶ地形（宇連の山の神、コウゴ／光石）など、岩石信仰において人工説が浮上することのある特徴的な事例を確認する機会となった。これらの岩石をどのように調査するかという点において、本稿では地質学的な分析を加えることで、全国各地の類例においても今後参考となる調査方法や知見を提示することができた。

また、岩石の種類の違いがどのように信仰に影響したのかも付記しておきたい。観察した例の中では、コウゴ／光石と亀岩（亀石）を除いて、4例が領家帯の花崗岩であった。花崗岩は節理沿いに風化しやすいが、風化した部分を取り除くと意外と硬い核の部分が残る。これを芯岩（コアストーン）といい、花崗岩の特徴的な風化形態の一つである。宇連の山の神はその場の岩の露頭であり、それ以外は転石である。しかし、いずれも大きな岩石であり、人の手で簡単に移動できるものではないので、ほぼ現地性の転石と推定される。

地質図上に産地を示してみると、いずれも碁盤石山周辺の花崗岩地帯に属することが見て取れるが、宇連の山の神は花崗岩分布域の南縁であり、変塩基性岩分布域との境界に近い。変塩基性岩近くにあるにもかかわらず、花崗岩を選んでいる。花崗岩が大きな岩塊として存在していることに、何か神聖視する傾向があるように思われる。コウゴ／光石の例のように、層理面が発達する堆積岩起源の領家変成岩は細かく砕かれ巨石にはなれない。設楽層群の岩石も脆く崩れやすいものが多い。そう考えると、設楽町の地質の中で唯一巨石形態をとることができるのが、領家花崗岩である。日本における巨石信仰が、花崗岩地帯に多いのかどうかについては、多くの信仰対象の岩石種を記載した上で、統計的に分析しないと判断できないが、今後解明していくべき課題の一つである。

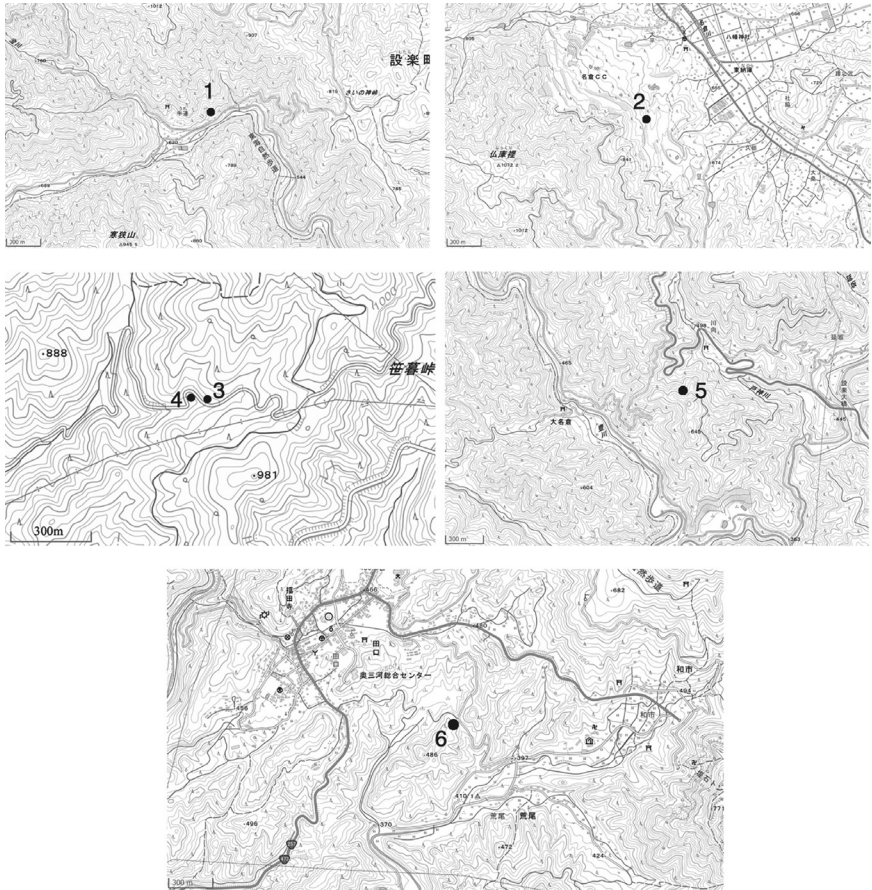
## 謝辞

本研究の現地調査にあたり、奥三河郷土館学芸員の金田直樹氏、設楽町文化財保護審議委員の加藤紘市氏、加藤博俊氏には現地の岩石信仰についての情報を提供いただくとともに、現地を案内してくださるなど、お世話になった。豊橋市自然史博物館の一田昌宏博士には、調査に同行していただき、岩石の種類について議論していただいた。宇連の岩クラでは、山の神の地権者である後藤秀夫氏に山の神の見学を許可をしていただき、案内もしていただいた。名倉カントリークラブ支配人の後藤利浩氏には、ゴルフ場敷地内にあるお船石の見学許可をいただき案内もしていただいた。以上の方々に心よりお礼申し上げる。なお、本研究は大谷大学真宗総合研究所の2021年度「一般研究（予備研究）」の補助により進められた。ここに記して感謝の意を表する。

## 文献

- 林 唯一・興水達司（1992）：愛知県東北部に分布する設楽層群のフィッシュン・トラック年代と最下部長篠累層産始新世貝化石。地質学雑誌，第98巻，901-904。
- 樋口清之（1927）：三輪山上に於ける巨石群。考古学研究，第1輯，59-70。
- 金田俊三郎（1951）：索引番号5文化財発見届（宇連部落の磐座）。『自昭和二十五年度至昭和三十五年度文化財関係綴』第一種（登録番号N358），61-63。
- 嘉藤良次郎（1955）：愛知県設楽盆地東部の地質構造（設楽盆地の研究，その1）。地質学雑誌，第61巻，51-61。
- 北設楽郡史編纂委員会〔編〕（1968）：『北設楽郡史 原始-中世』。635ページ，北設楽郡史編纂委員会，設楽。
- 牧本 博・山田直利・水野清秀・高田 亮・駒澤正夫・須藤定久（2004）：20万分の1地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」。産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 大場磐雄〔著〕・茂木雅博〔解説・編集〕（2016）：『楽石雑筆（補） 記録-考古学史』。560ページ，博古研究会，香取。
- 鳥居龍蔵（1926）：日本の古い巨石遺跡に就いて。自然科学，第3号，537-546。
- 柳原輝明（2011）：天球を地上に写した古代人。渡辺豊和〔編著〕：『イワクラハンドブック』。イワクラ学会，158-174，大阪。





補遺 各岩石の詳細な位置図。1：宇連の岩クラの山の神，2：お船石，3：立石，4：蛇岩（蛇石），5：コウゴ／光石，6：亀石（亀岩）。国土地理院ウェブサイトの地理院地図を使用した。

Appendix. Detailed location maps of each belief stone in the text. 1: mountain god at Ure hamlet, 2: boat stone, 3: standing stone, 4: snake rock, 5: shining stone, 6: turtle rock. Maps are derived from the website of the Geospatial Information Authority of Japan.

